

朝鮮青年社

全泰壹

下辛洙訳

炎と青春の叫び

遺稿集

大統領閣下へ

あの就寢でわれを知らないうちが

これ以上傷つく前に

保護してやって下さい

勤労基準法では子どもたちの保護を

成文化していますが

何故守られていないのですしょうか

私たちの要求は

女工の手当額を100ウォンから150ウォンに

1日15時間の労働時間を10-13時間に

1-4月2回の休日を週休に

して下さることです

これは、人間として最少限の要求で

大統領への手紙より



遺稿集 炎と青春の叫び

昭和52年11月1日 初版発行

著 者	全 泰 壹
発行所	朝鮮青年社 東京都文京区白山4の33の14 (朝鮮出版会館内)
	電話 東京(813) 2291
	振替 口座(東京)83628
印刷所	新協印刷株式会社
製本所	㈱ 宮 田 製 本 所

落丁本，乱丁本は本社でおとりかえいたします

遺稿集

炎と青春の叫び

全泰壹／卞宰洙訳



朝鮮青年社



全泰壹青年（上）

息子念願の労組が結成された日、
泣きくずれる母李小善さん（下）



ソウル市中区清溪川5・6街一帯に広がる雑居ビルの群一。一見巨大なビル街に見えるが、ビルの中に一歩足を踏み入れると、箱部屋のような無数の《工場》がギッシリ密集している。全泰壹青年が働いていた、〈平和〉〈東和〉〈統一〉商街と呼ばれるこの一帯は、南朝鮮の主力産業、被服製造業の中心地で、500余の零細企業に1万余名の縫裁女工たちが働いている。





《工場》といっても、ほとんどが7坪ぐらいの屋根裏のような世間部屋に5・6台のミシン機をそなえた従業員20名以下で、工場のイメージにはほど遠い。ここは勤労基準法適用の疎外地帯でもある。1日15時間労働で日給わずか70ウォン。休日はほとんどなく厚生、呉染施設などももちろんない。1万余名のうら若き乙女たちがこの劣悪な労働条件下で、青春を、肉体を蝕まれていく。



全泰壹青年の焚身の抗議は、南朝鮮の労働問題に大きな波紋をまき起こした。至難といわれた労組も事件後すぐ結成された。

●遺稿集●

炎と青春の叫び

発刊にあたって

一九七〇年十一月十三日、ソウル市内清溪川一帯に密集する被服製造会社群より平和市場前で一人の青年がガソリンを全身に浴び、焼身自殺した。

彼の名は全泰壹^{チョンテイル}といい、この平和市場内の被服製造業・旺盛社で裁断士補として働いていた二十三歳の青年で、この遺稿集の著者である。

全泰壹青年は、平和市場内企業の劣悪極まる労働条件と超低賃金で苦しむ二千七百余名従業員仲間の親睦団体「三棟会」を組織し、企業主に作業場の環境改善と労働条件の改善を要求して、その日ストライキを決行したが警官隊に鎮圧されたのに抗議して自殺したものだ。

当時、この事件は新聞やテレビに大きく報道され、社会的に大きな反響をよんだ。一九六九年の「三選改憲」反対闘争以来、一年数カ月もなりをひそめていた学生デモが、全青年の抗議自殺を機に一斉に吹きだし、「全君の死は他殺だ」、「勤労者の生存権を保障せよ」などのスローガンをかかげてデモを行った。この全青年の焼身自殺に触発された学生闘争は、やがて翌七一年春の「大統領選挙」に向けて、朴「政権」の足を激しく揺ぶる大闘争に発展することになる。

全泰壹青年は平素から文章を書くことを好んだ。彼の死後遺品のなかから発見された数冊の青ビニールカバーの大学ノートは、中学出の青年とは思えぬすぐれた文章力と深い知識の持ち主であることをうかがわせる日記形式の手記で埋めつくされていた。

この遺稿集は、人生の半ばなかにおいて散らねばならなかった青春告発手記である。かれの手記の全体に流れる、挫折から前進をみつめ、失意から希望をみつめるその姿勢は、例えば大学ノートの表紙裏の余白等に記された「絶望はない」、「明日に生きる」といった走り書きが如実に物語っている。一部に彼の死を若者の英雄主義や、刹那主義的な角度からとらえようとする評価もあるが、全泰壹青年をそのような見方でとらえるのは全く正しくない。

この遺稿集は、全泰壹青年の死後、数人の友人らによって整理され、B四版のガリ版刷り約五十余ページにまとめられていたものを当社が入手し、それを底本に以前に断片的に紹介された『新東亜』（一九七一・一号）から若干補充したもので、これまで発表されたものとしては最も原型に迫ったものである。

尚、本書では、便宜上若干の中見出しと小見出しを編集部で新たに加えたことと、内容の理解をスムーズにするための註を添えた。

一九七七年五月十日

朝鮮青年社編集部

「血の海」の中で

——全泰壹青年の死と「日韓」状況——

岡本愛彦

一九七〇年十一月十三日という日付けは、永久に記憶されなければならない。

それは、南朝鮮の一人の若者が、死を賭して朴ファッショ政権の暴虐に抗議した日という意味に於てだけでなく、彼と同様に米日両帝国主義とその傀儡としての朴正熙らに収奪・弾圧され、悲惨な生活を余儀なくされているすべての南朝鮮労働者人民、そして世界の多くの人々が拳を固め、身を振わせ、この一人の若者の怒りと抗議の死を自らのこととして慟哭した日として……。

全泰壹青年（当時二十三才）のこの「遺稿集」を読み終えたとき、「日本人」である私は、率直に「我々」がこの若者を殺した「共犯者」或いは「主犯」であることに湛えられない悲しみと怒りを感じた。

近代一〇〇年史を繙くまでもなく、一八七五年の明治政府による武力侵略以来一〇二年間、日本帝国主義は一貫して朝鮮民族を侵略しつづけてきた。「統監府」政治を含めて四〇年間にわた

る暴虐な植民地支配は、如何なる贖罪の方法を以てしても償いえない重大な犯罪行為であったし、日本の敗戦と朝鮮民族の解放後は、再びアメリカ帝国主義者の走狗として、五千万朝鮮民族の悲願である南北朝鮮の自主的平和統一を妨害するという許すことのできない犯罪行為を、一貫してとりつづけてきた。

わけでも一九六五年、いわゆる「日韓基本条約」締結後、日本独占資本は歯止めを失ったかのように南北朝鮮に侵略的な進出をとげ、南北朝鮮経済を完全に自己の支配下におさめた事実を、我々は確実に認識しておかなければならない。

朝鮮民族の分断固定政策は、このことによって確実に進められたのである。

南北朝鮮経済は「日韓基本条約」によって日本独占資本の下請け経済となった。逆に言えば、日本経済は南北朝鮮の労働者階級人民の膏血をすすって繁栄し、労働者人民は日本資本の収奪の中で貧窮の度を加えていった。

日本帝国主義者と独占資本は、まるで汚物を投棄するかのように公害企業を南北朝鮮に進出させ、低賃金労働力をフルに利用して、可能な限りの利益をむさぼってきた。

そして何よりも、そのことを可能とさせる朴正熙軍事独裁政権を温存するために、凡ゆる卑劣な手段を行使してきた。

ソウル地下鉄建設等をめぐる信じられない闇取引（三倍の価格）によって日本独占は尨大な利

益をあげ、その三〇パーセント以上が朴正熙と日本政府自民党に政治献金として支払われたと伝えられているが、そのツケを払わされるのは当然南朝鮮の労働者人民なのである。

朴ファッショ政権は、田中角栄に三億円を支払ってKCIAによる金大中氏拉致事件を「政治解決」させたが、その金を支払わされるのも南朝鮮の労働者、人民である。

岸・福田らをはじめとする「日韓」ロビーストや自民党に還元された南朝鮮からのリベート、つまり「政治献金」は、名目的に一千億円、実質的にはその二、三倍にも達すると噂されているが、そのツケを自らの低賃金と余りにも劣悪な労働条件とで支払わなければならないのも、南朝鮮の労働者人民である。

朴「政権」の破綻した経済と龐大な国際収支の赤字をとりつくりうために画策されている「KIDC」（韓国産業開発公社）構想によって日本から一〇億ドル、総額四〇億ドルをかき集めようとする「日韓」反動たちの計画がある。

然しその実、この四〇億ドルは新しく策定された「五ヶ年計画」中にすべて南朝鮮の国際収支赤字分の金利として消え去る金額であり、何ら南朝鮮労働者人民の生活の向上に役立つものでないばかりでなく、四〇億ドルの負債は、これまた当然南朝鮮労働者人民の低賃金と苛酷な労働条件を更に倍加させる要因になってゆく。

全泰壹青年の抗議の死は、こうした状況の反映としての歴史的な意味があったのである。

更に、南朝鮮労働者人民を追いつめるより重要な点として、南北分断固定のための侵略軍としての米軍の存在のあることを忘れてはならない。日本帝国主義者、軍国主義者、そして独占資本の側から見る限り、この駐「韓」米軍の存在は、南朝鮮における自らの侵略的植民地支配的權益を守るための「番犬」として、貴重な意味を持つ。

「佐藤・ニクソン」共同声明における「韓国条項」から今回の「福田・カーター」による「新韓国条項」にいたる米日反動の企図は、一貫して米日「韓」を一体とする軍事同盟の強化と「南朝鮮の自主的平和統一」の阻止であった。

そこには、自らの權益の為には（実質的）植民地支配下の民衆の「悲願」など全くもの数ではないとする強権支配意識が余りにも露骨に見えすいているのである。

南朝鮮人民の中に絶望感と無力感が芽生えるとするれば、それは「第三の李完用・朴正熙」が、またしても国を売り渡してしまったことによる。

南朝鮮の人民は、何よりも先づ自らの国を米日反動の手から人民の手にとり戻したいと願っているに違いない。

そして「民族」としての誇りうる「主体」をうち立て、たとえ乏しくともそれをすべての人民でわかち合い、自らの手で南朝鮮の民主化と祖国の統一を達成したいと願っているに違いない。

全泰壹青年の怒りと抗議の死は、まさしくそうした南朝鮮人民の怒りと抗議を代弁するものであった。

「全泰壹遺稿集」は、南朝鮮人民がいま再び一九〇〇年代前半と同じ、或いはそれを上まわる『血の海』（ピバタ）の中にあることを具体的、実証的にさし示してくれている。朝鮮民主主義人民共和国の不朽の古典的名作『血の海』（演劇・映画）は、日帝の植民地支配下で「血の海」と化した全朝鮮の中で、祖国の光復のために闘った革命的な人々の姿を描きつくした輝かしい作品であった。

そして一九七〇年十一月十六日――

現代の「血の海」の中で、全泰壹青年は実質的に虐殺されていたのである。

その年一九七〇年は、民族の反逆者・朴正熙が卑劣な大統領三選改憲を謀略的に果した年（「三選改憲」を果した日は一〇月一七日、全青年の死の丁度一カ月前のことである）であり、反朴三選改憲反対、反ファシズムの嵐が大きなうねりとして南朝鮮をおおっている年であった。

朴正熙の子を妊みこもったコールガール鄭仁淑が権力の手で虐殺されたのが、この年一九七〇年三月十七日夜のことであったし、詩人金芝河氏の詩「五賊」が南朝鮮の雑誌『思想界』に発表され、朴政権に重大な衝撃を与えたのがこの年の五月号、金芝河氏と『思想界』社長夫琬赫氏らが逮捕